

本学の英語名称・略称・合言葉の変遷

英語名が Tokyo University of Engineering という時代があった



外国での自己紹介で Tokyo Institute of Technology と言うと “Oh, Tokodai” という返事が返ってきて驚くことがある。年配の方で日本に留学経験のある人にとっては、Tokyo Institute of Technology (Tokodai) だったようだが、2004 年の国立大学法人化を機に、Tokyo Institute of Technology (Tokyo Tech) と洒落た略称に変更され、新たにロゴマークも導入されたために、それ以前の卒業生をはじめとする本学関係者には分かりづらくなっている。ここでは、東京工業大学、工大、東工大、東京工大、及び余り知られていない旧英語名 Tokyo University of Engineering から、戦後に、現在の Tokyo Institute of Technology に変わるいきさつ等を紹介する。大学の顔とも言えるシンボルマークやロゴマークや合言葉にも触れたい。

1. 大学昇格から終戦まで (1929 ~ 1945)

東京工業大学

Tokyo University of Engineering

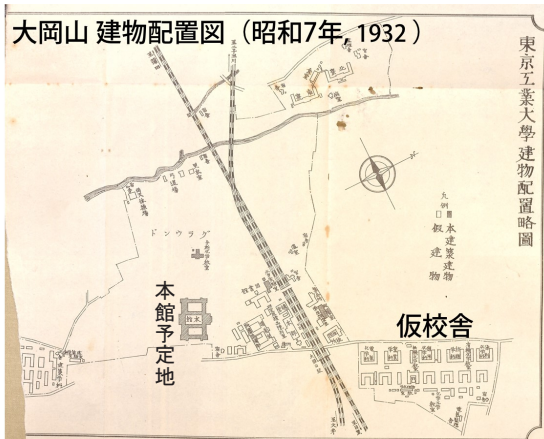
幾多の苦難を乗り越えて、本学が大学昇格（東京高等工業学校から東京工業大学へ）を果たしたのが 1929 年（昭和 4）で（注 1）、この時の英語名は Tokyo University of Engineering だった。実際に大学昇格が決まったのが 1923 年だったが、同年 9 月 1 日の関東大震災の影響でスタートが 6 年も遅れるとともに、キャンパスも蔵前の地から大岡山に移転することになった（図 ①）。大岡山の地では、しばらく「東京高等工業学校」の看板を掲げざるを得なかったが、正式に大学になってからは研究に重点を置いた教育方針のもとで優れた研究成果が生み出され、本学の存在感が増した時期でもあった。しかし、英語名称が現在と違うために、世界の科学史家を混乱させ正当な評価がなされていないのではないかと危惧される出来事があったので、注意喚起を兼ねて紹介したい。大学が発行した正式パンフレットにも誤りがある（注 2）。

等工業学校」の看板を掲げざるを得なかったが、正式に大学になってからは研究に重点を置いた教育方針のもとで優れた研究成果が生み出され、本学の存在感が増した時期でもあった。しかし、英語名称が現在と違うために、世界の科学史家を混乱させ正当な評価がなされていないのではないかと危惧される出来事があったので、注意喚起を兼ねて紹介したい。大学が発行した正式パンフレットにも誤りがある（注 2）。

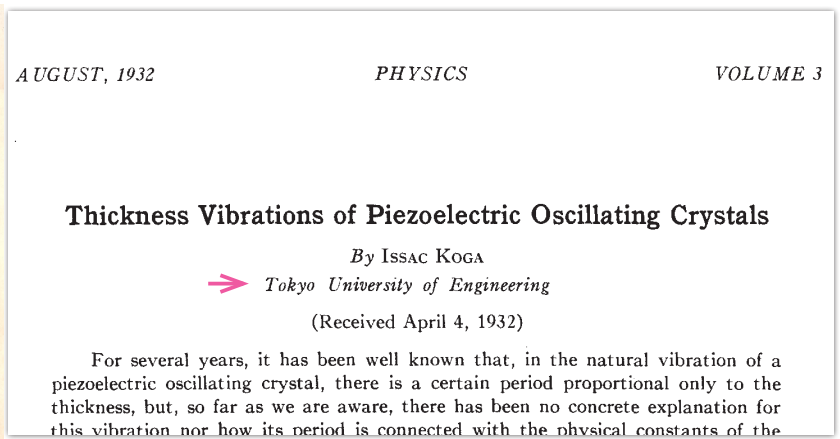
1-1. 温度非依存性の水晶振動子が開発されたのは 東工大では？

この時期の研究の代表的なものの 1 つに、古賀逸策（1899 ~ 1982）グループによる

水晶振動子の開発がある。水晶振動子といえばクォーツ時計を思い浮かべるが、水晶振動子なしにはスマホも動かないし、パソコンの心臓部である CPU も動かない（図 ③）。現代の情報化社会を支える陰の立役者だが、当時は水晶振動子の応用を阻む大きな問題があった。電圧をかけた時の振動数が温度に依存するために、一定の振動を得るためには恒温槽が必要だった。これでは用途が限られてしまう。古賀さんは水晶から薄い板を切り出す時の板面の向きによっては、温度感受性がほぼゼロになる角度があることを理論的に導き出し、実際にそのような水晶振動子を作製することに成功した（1932 ~ 1934 年の仕事）。この業績に対しては日本学士院賞が授与



① 初期の大岡山キャンパス



② 古賀逸策の 1932 年の論文。所属の表記に注意（赤矢印）。



③ 古賀逸策と水晶及び水晶デバイス内蔵品



④ 古賀逸策を記念して創設された若手研究者向けの金メダル（表と裏）

された。またエレクトロニクス産業の隆盛と歩みをともしてきた日本水晶デバイス工業会の活動などを通して、国内的に広く知れ渡るとともに、国際的にも国際電波科学連合 (URSI, International Union of Radio Science) が若手研究者向けに古賀さんの名前を冠した金賞 (図④) を設けるなどの顕彰をしているので、古賀グループによる水晶振動子の開発は忘れられることはないのだが、世代交代が進むにつれ、古賀さんの研究が本学でなされた^(注3)ことがおぼろげになりつつある。先日イスラエルの科学史家で水晶振動子の歴史を調べている Shaul Katzir (Tel Aviv University) から日本水晶デバイス工業会 (QIAJ, Quartz Crystal Industry Association of Japan) 宛てに、古賀逸策に関する問い合わせメールが届き、それが本学の博物館に転送された。転送のいきさつはこうだ：水晶振動子の開発史に関する資料は、QIAJ に保存・展示されていたが、QIAJ 事務局の移転 (2013 年 8 月) を契機に、それらが本学の博物館に寄贈されていた。そんなわ

けで、博物館関係者が Katzir さんのメールに回答することになったが、古賀らの日本語論文の要旨とともに、英語論文 (図②) にある所属 (Tokyo University of Engineering) は Tokyo Institute of Technology の旧名称だと添え書きしたところ、大変感謝された。日本人でも、著者の所属が Tokyo University of Engineering となっていたら東京大学と勘違いするだろう。原著論文にあたって丁寧に調べれば調べる程、混乱する。ここは本学 Web ページの沿革で説明しておくべきところだ。

1-2. フェライトが発明されたのは本当に東工大で？！

ほぼ同じ頃になされたフェライト^(注4)の発明 (1930 年) に関しても、加藤与五郎 (1872 ~ 1967) と武井武 (1899 ~ 1992) によって書かれたオリジナル論文の著者所属は Tokyo University of Engineering となっている (図⑤ B)。この場合は、米

国電気電子学会 IEEE (アイ・トリプル・イー) によって歴史的偉業 (Milestone) に認定され、本学が発祥の地として明記されているのでさほど心配することはないが、丁寧にオリジナル論文に目を通した人には、Tokyo University of Engineering で発明されたはずのフェライトがなぜ IEEE マイルストーン (図⑤ C, D) では Tokyo Institute of Technology で発明されたとなっているのだろうと怪訝に思うに違いない。



B Kato & Takei, 57th AES, 1930

¹ Manuscript received February 19, 1930.
² Professor, Tokyo University of Engineering,
³ Assistant Professor, Tokyo University of Eng
 297



D IEEE MILESTONE IN ELECTRICAL ENGINEERING AND COMPUTING

Development of Ferrite Materials and Their Applications, 1930-1945

In 1930, at Tokyo Institute of Technology, Drs. Yogo Kato and Takeshi Takei invented ferrite, a magnetic ceramic compound containing oxides of iron and of other metals with properties useful in electronics. TDK Corporation began mass production of ferrite cores in 1937 for use in radio equipment. The electric and electronics industries use ferrites in numerous applications today.

October 2009

⑤ フェライトの発明者 加藤与五郎と武井武 (A), 論文の著者所属 (B), IEEE Milestone プレート (C), 及びその文言 (D)

Expansion and Pressure Coefficients of Nitrogen, Hydrogen, Helium, and Neon, and the Absolute Temperature of 0° C. By M. KINOSHITA and J. OISHI.

WITH a view of obtaining a possible accuracy of 0.01° for the value of 0° C. on the absolute temperature scale, measurements of expansion and pressure coefficients of N₂, H₂, He, and Ne were undertaken by means of a gas-thermometer.

Description of the Apparatus

Tōkyō Kōgyō Daigaku
(Tokyo University of Engineering). ←
May 1936.

⑥ 木下正雄と大石二郎の絶対零度に関する論文 (Phil. Mag. Series 7, 1936)

1-3. 絶対零度を決定したのも 本当に東工大？！

資史料館の刊行物“シリーズ「発掘！東工大の研究と社会貢献」”の第2号で紹介した絶対零度（-273.15℃）の小数点以下2桁目を決め、度量衡の世界に大きな足跡を残した木下正雄と大石二郎^(注5)のオリジナル論文の著者の所属はTokyo Kogyo Daigaku (Tokyo University of Engineering) となっている(図⑥)。これも本学の英語名の変遷を知らない外国人からすると「？」ないしは「東大？」と勘違いしそうだ。

英語圏の人が、インターネットによる検索で“Tokyo Institute of Technology”と入力しても上記の水晶振動子、フレイイト、及び絶対零度などに加え、中田孝の歯車研究^(注6)に関する業績はヒットしないことになり、若い世代に語り継がれなくなる恐れがある。名称変更は、はっきりした形で記録に残す必要がある。この点に関しては、残念ながら教授会記録等は残っていないので、状況証拠から、いつTokyo University of EngineeringからTokyo Institute of Technologyへと変更されたかを推測するしかないが、科学教育史家の岡田大士（中央大学法学部・准教授）は、本学在学中にまとめた博士

論文で1947年前後と結論している^(注7)。

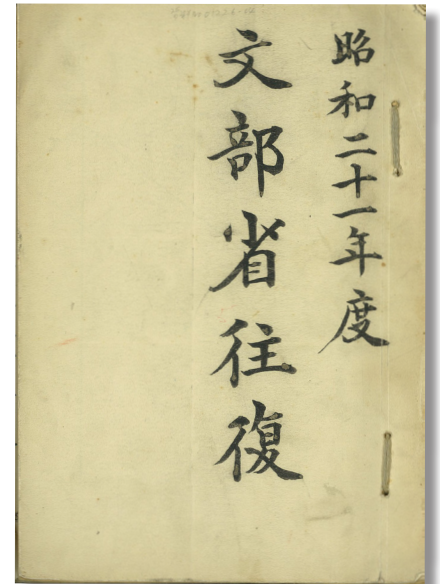
いずれにしてもTokyo Institute of Technology (formerly Tokyo University of Engineering) を世界に周知させなければならない。

2. 戦後から現在（1946～）

東京工業大学

Tokyo Institute of Technology

その後、博物館に収蔵されている終戦直後の文書綴りの中に、本学の英語名の変遷を示す資料があることが判明した。『昭和21年度 文部省往復』文書(図⑦)を調べていた道家達将（特命教授）が、その簿冊の中に、手書き原稿とそれを翻訳・タイプし文部省に提出したものが綴じ込んであるのを見つけたのだ(図⑧)。手書き原稿では、一旦Tokyo University of Engineeringと書いたものを横線で消し、Tokyo Institute of Technologyと書き直しているではないか。まさしく探し求めていた文書で、Tokyo University of EngineeringからTokyo Institute of Technologyへと正式に英語名称を変えることにした直後に作成されたことを物語っている。戦後の学制改革で新制大学に代わる時に(昭和24年, 1949), 英語名称を変えたのではないかという推測もあった



⑦ 文部省往復書簡 (昭和21年, 1946)

が、実際にはそれ以前の昭和21年(1946)である可能性が高い。

この文書は、GHQの求めに応じて文部省が各大学の学生用 福利・厚生関係の調査をしたもので、英文での回答となっている。質問は3項目からなり、英文回答の方は3項目とも控え(計3枚)が残されているが、手書きの日本語原稿の方は3項目目の1枚のみがファイルされていた。その意図は不明だが、オリジナル原稿を残してくれた当時の事務官に感謝しなければならない。

2-1. 本学の略称

相澤益男 学長の時に、「東京工業大学の略称に関する申合せ」が制定され、本学の略称が次のように統一された：(日本語) 東工大、(英語) Tokyo Tech^(注8)。本学の学生は好んで「工大」と言っていた時期があった。ゴルフで“The Open”といえば、全英オープンをさすように、「工大」には元祖の響きと気概が込められていたからだろう。しかし、これでは外向きには通じにくい、自意識過剰とも受け取られるので、「東工大」が一般的だったが、発音から「頭硬大」を連想されてしまうので、一時期「東京工大」派が増えた。1969年4月に創刊された広報誌が「東

ANSWERS TO QUESTIONNAIRES ON STUDENTS WELFARE

Name of University Tokyo Kogyo Daigaku (Tokyo Institute of Technology)
 (The Tokyo University of Engineering)

D: - HEALTH

- 3 1. a) 大学附属病院 付
 昭和 順天堂病院及昭和医事附属病院: 要記の診察科等 2 割 別引 2 割
 b) teeth 付, nose 付, ears 付, throat 付, eyes 付
- 3 1. x 半ば強制的: 腸チフス, コレラ, 痘疹, 予防接種及痘疹予防 B, C G 接種
 手術者 予備 2 名, 看護婦 2 名
 予防薬入手先 傳染病研究所
- 3 2. 強制的, 授業科目の 1 つに 4 月 20 日 選擇科目 = 「医学及生理学」
 7 設け

ANSWERS TO QUESTIONNAIRES ON STUDENT WELFARE

NAME OF UNIVERSITY: Tokyo Kogyo Daigaku (Tokyo Institute of Technology)

TOTAL NUMBER OF STUDENTS ATTENDING:

D: - HEALTH

1. a) No hospital is attached to the Institute. At present
 Jyutendo Hospital and Showa Medical College (Showa Igaku
 Senmon Gakko) are entrusted with medical care for the
 Institute. 20% deduction in charge is made.
 charge
- b) No medical facilities are available for teeth, nose, ears,
 throat and eyes.
- 1 x. Non-compulsory shots are given for typhoid, cholera,
 tuberculosis (B.C.G.), and smallpox vaccination is given.
 Staff: Two physicians and two nurses.
 Sources of Medical supplies: Research Institute of
 Contagious Diseases (Densenbyo Kenkyusho).
2. [No] compulsory courses in hygiene and sanitation are given.
 From April 1946 an elective subject is provided for " Medical
 and Biological Sciences "



⑨ 広報誌の名称も、本学の略称の統一を受けて、東工大クロニクルに変更された。上：旧名称の最終号 No. 384，下：新名称のスタート号 No. 365 (April, 2002)。



⑩ 工大祭の子供向けチラシ。学生支援 GP のデザインカフェで当時建築学科の学生だった渡辺薫が作製。

京工大クロニクル」と命名され、学内的にも「東工大」と「東京工大」が混在することになった。その後の統一の動きを受けて広報誌は、2002 年 4 月号から「東工大クロニクル」に改称されている（図⑨）。唯一「工大祭」^{注9}が生き延びているが、これは語呂からいって、永続するだろう（図⑩）。英語の略称としては、email address に titech (tokyo institute of

technology) が使われていたが、分りにくいということで Tokyo Tech となった。既に使われている email address を変更するのは大きな混乱のもととなるので、よほどのことが無い限り titech は用途限定で今後も使われることになるだろう。

2-2. シンボルマークとロゴマーク

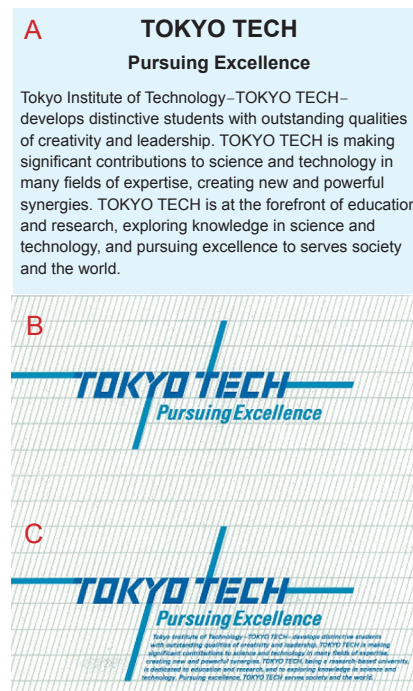
本学のシンボルマーク（図⑪）は、工業の「工」の字を図案化して外に開いた窓を表し、そこから「大」の字をかたどったツバメが勢よく飛翔する様子を描いたものといわれている。このマークは、堀進二（1890～1978，東京美術学校 教授）のデザインによって、1948 年に誕生して以来、学生・職員バッジの図案などとして広く親しまれてきたが、ツバメの形などが不揃いだったために、創立 100 年（1981）に際し、本学に馴染みの深かった東京藝術大学の教官（手島有男，下記の百年旗参照）の協力を得ながら、きちんと形を決め、正式なシンボルマークにした。

ロゴマーク（図⑫ B）は比較的新しく、2007 年 1 月に本学のブランド力を高める戦略の一環として導入された。一昔前までは、本学に対する褒め言葉は「煙突のあるところ 蔵前（人）あり」（どの工場も蔵前卒でもっている）だった。この言葉は本学関係者の合言葉（モットー）としても定着し、自他ともに認める蔵前精神となっていたが、時代とともに工場から煙突が消え、製品もハードからソフトへと変化する中であって、新しいキャッチフレーズが必要になっていた。しかし、本学のブランドイメージを一言で表現するのは難しく、妙案がないまま、国立大学法人化という大変革にさらされ、待ったなしの状況で提案されたのがメッセージ付きの Pursuing Excellence だった（図⑫ A，2006 年 6 月 16 日の部局長等会議）。これを図案化した最終ロゴマークは、名刺・封筒・レターヘッド・パワーポイント版なども作られており、本学の宣伝に一役買っている。

このロゴマークは当時の学長補佐室におい



⑪ シンボルマーク。1948 年に原形が作られ、1981 年に正式にシンボルマークとして登録された。グラウンドの東南脇には、ツバメの名を冠した「つばめ寮」があった（右：1950 年に旧弓道場を改築して 14 名収容の寮としたもの；百年史・部局史，pp. 1077-1079）。



⑫ 略称・理念・メッセージ (A)。メッセージの表現は、最終版では一部変更になっている。(B, C) 斜め野線上に配置されたロゴマークとメッセージ付きロゴマーク。

て、真島豊（現 学長補佐，応セウ研教授）が中心になってまとめたもので、図案はプロのデザイナーである国東照幸が担当した。このロゴマークが初めてお披露目された部局長等会議（2007 年 1 月 5 日）では、国東さんの言葉として次のように伝えられた：「ツバメマークもいいのですが、少し古めかしいですね。新しいマークでは、“強さ”と“未来を感じさせるような動き”をイメージし、4 方向へエネルギーが飛び交うさま及び東工大の卓越した教育研究拠点としてのグローバルな影響力を表現したつもりです。バーの長さや傾きや色など、適当に変えないで

ください」。

本学のキャッチフレーズとしては、法人化よりもかなり前に、“SciTech Fountain”が提案されたが普及しなかった。本学は、以下でも紹介するように、究理（理を究める）と精技（技術をみがく）という2本柱を掲げ、科学技術の先端を切り開くとともに科学技術を担う人材を世に送り出してきた。科学技術を通して社会を潤す SciTech Fountain に例えることが出来るという意味で魅力的な表現であり、心に留めておいていだろう。

2-3. 創立百年を記念して贈られた「究理」と「精技」の旗

入学式や卒業式では、壇上の奥に、本学のシンボルであるツバメマークが掲げられる（図9下）。その両脇に掲揚されるのが赤地に白抜きで「東京工業大学」と書かれた2旗の旗で、緑の縁取りのある方が「究理」を、金の縁取りが施された方が「精技」を表す。これらの旗は、本学の創立百年を記念して、1981年に蔵前工業会から贈られたもので、百年旗とよばれている（図13）。究理と精技を合言葉に、究魂たくましくやってきた先輩たちの思いを引き継いで欲しいという願いが込められている。デザインを担当したのは手島有男（当時 東京藝術大学 助教授）で、本学発展の基礎を築い



13 建学の精神「究理」と「精技」を表す百年旗（同窓会からの寄贈）。

た手島精一（1850～1918、ウッドデッキ脇の像）の孫にあたる。

（注1）大学昇格運動の背景：我国における高等教育機関は、当初は「帝国大学令」に基づく帝国大学のみであったが、1918年に「大学令」が制定されて公私立大学及び単科の官立大学を設置することが可能になった。これを受けて、東京高等商業学校が東京商科大学（現一橋大学）に昇格し、長崎・岡山・金沢・千葉・新潟の医学専門学校が医科大学へ昇格した。続いて、東京高等工業、大阪高等工業、神戸高等商業、東京高等師範、広島高等師範の5校が昇格の予定だったが、政治的な思惑（大学は学問の場であり実学は大学にそぐわないとする反対派と学理のみならずその応用の時代が始まっているとする推進派の政治的対立）から、文部省の思惑通りに進まず、5校の大学昇格はすぐにはかなわなかった。

“おあずけ”をくらった東京高等工業学校（本学の前身）では、学生や卒業生からも昇格の要求が高まっていた。そこには、帝国大学卒業生と東京高等工業学校卒業生の学歴による大きな格差問題があった。例えば、「電気事業主任技術者」の等級は、第1級から3級まで分かれており、帝大卒は1級の資格が取れるのに対し、高等工業卒は3級しか取れなかった。このように大きな社会的格差があった上に、1907年に設置された4年制の明治専門学校や1908年に誕生した早稲田大学理工科（早稲田は1年間の予科と3年間の本科の合計4年）の卒業生は2級の資格をとれるようになったために、工場では後発の学校であったはずの早稲田卒の下と見られるようになり、不満がつづいていた。そこで、東京高等工業学校では、大学と同等の資格を得られるように、「専攻科」ないしは「予科」設置といった形での修業年限延長運動が電気工学科の生徒・卒業生を中心に、大学令の制定以前から盛んになっていた。大学令の制定で期待が膨らんだが、上述のよ



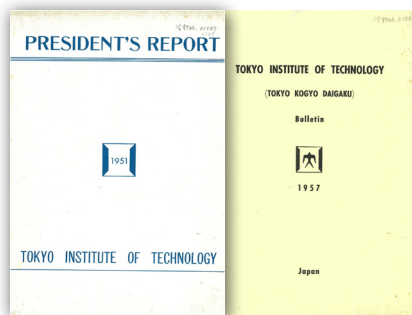
14 大学昇格を求めて文部省前に集結した本校生（1919年11月27日）。

うに思うように進まず、さらに悪いことに、火に油を注ぐような事態が進行していった；大学令施行の直後（1919～1920年）に、慶應・早稲田・明治・法政・中央・日本・同志社・国学院などが相次いで大学として認可された上に、新聞社の勇み足で「大阪高等工業学校が大正9年度（1920）の追加予算にて、単科大学に昇格することに決定」というニュースが流れた。ことここに至ってはもう我慢ならないと、学生たちが立ち上がり「総退学騒動」などを経て、1923年に漸く予算案が帝国議会を通過した。この間のいささつや関東大震災の影響で実際のスタートが遅れたこと等については、本学の130年史（pp. 81-87）に詳しく書かれている。

早稲田大学との関係：早稲田大学がそれまでの法文経系の学部に加えて、1908年に機械工学科・電気工学科を作る際に、教授陣の確保や教授要目の作成など全面的な協力をしたのが本学だった（裏話を含めた詳細は、「東工大130事業事務局」Web pageの「東工大の歴史」参照）。

東京都市大学との関係：図1の仮設校舎跡地（清水窪地区）には、武蔵工業大学（現東京都市大学）が居を構えていた（1932～1939の7年間）が狭隘になったために現在の等々力に移転した。

（注2）1951年に発行された英文の大学案内（図15）。この中のHistory（p. 9）で、"Whilest, in April 1929 the school was promoted to the rank of university to be renamed the Tokyo Institute of Technology (Tokyo Kogyo Daigaku)..."と説明しているが、ここはTokyo University of Engineering (Tokyo Kogyo Daigaku; later, in 1946, renamed Tokyo Institute of Technology)



15 英文の大学要覧（1951 & 57）。本学の英語名称の変遷が間違っている。

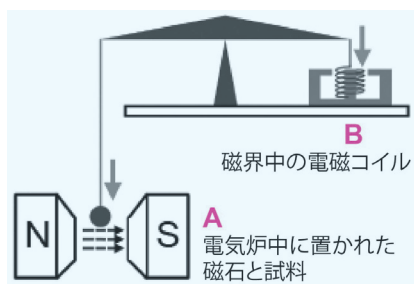


16 水晶振動子の研究で有名な古賀研究室があった時計台の見学を終えて、記念写真に納まった総合科目「“東工大”学入門」の受講生（2014）。

とすべきところだった。同様の誤った説明は、これ以降の英文パンフレットでも踏襲されてしまった。

(注3) 水晶振動子を開発した古賀逸策研究室は時計台にあった（図16）。

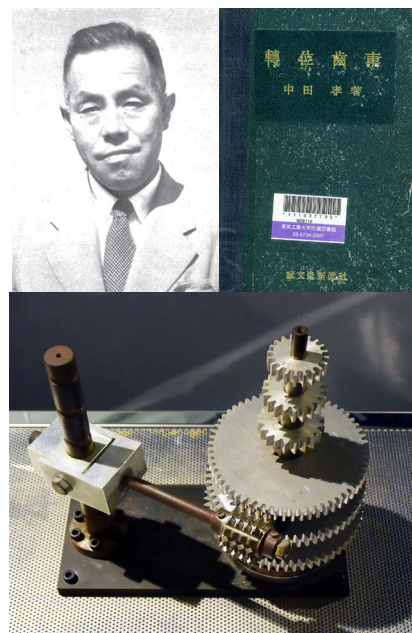
(注4) フェライトは磁性材料として多方面



17 磁気天秤の原理。試料の磁性特性が温度によってどのように変化するかを測定するための装置。A 部で試料が磁石に引かれる。この力と釣り合うように、B 部のコイルに流す電流を変えることにより、試料の磁気特性を知ることができる。

で利用されている。一世を風靡した磁気テープが再び記憶媒体として蘇ろうとしていると伝えられているのはフェライト発祥に地である本学にとっては嬉しいニュースだ。以下、平成23年度（2011）第5回（通算第24回）蔵前ゼミの印象記 p. 3 からの引用：フェライトなしには現代社会は動かない。このフェライトの磁気特性を自在に操れるようにし、フェライト磁石を発明したのが本学であることは覚えておこう。本学が蔵前の地から大岡山に移転（1929, S4）して間もなくのことだ。当時 亜鉛 Zn を製造していた日本曹達は、湿式精錬の過程で生じる「邪魔者 Zn-ferrite」に困っていた。そのために収率が落ちてしまうのだ。しかも硫酸にも溶けない。困った日本曹達は、本学の加藤 与五郎（1872～1967）に相談を持ちかけた。加藤さんは2周りほど年下で助教授になりたての武井 武（1899～1992）にその仕事を託した。

武井さんは新しく開発した“磁気天秤”（図17）を用いて「邪魔者」扱いされている物質及びその類縁化合物を作ってそれらの性質を詳しく調べようとしていた。磁気天秤は、天秤の一方を電気炉内に收容し、もう一方は外に出した状態で測定するように工夫されており、温度変化と磁気変化を精密に測定できる画期的な装置だった。これだけでも世界的な業績だ。そして1930年にさらなる「神の恵み」がもたらされた。6月のある日、帰宅時に電気炉の電源は切ったが、うっかりと磁力を発生させるための電気コイルの電源を切り忘れてしまった。翌日来てみると磁気天秤が大きく傾いているではないか。「邪魔者の仲間」が強力な磁石（フェライトマグネット）に変身していたのだ。こうして、 CoFe_2O_4 を高温に加熱した後、磁場をかけながら冷却すれば強力な磁石（コバルトフェライト）が得られることが分かった。「1つのスイッチの切り忘れ」が大発見をもたらした。「フェライトの父」とよばれるようになった武井さんは、この日の出来事を「神の恵み」といつていたそう。



18 中田孝（1908～2000）らは、今日の歯車研究の基礎を築いた。特に転位歯車の実用化に多大な貢献をした（学士院賞、1953年）。右上：ロングセラーとなった中田の著書『転位歯車』（1949）。下：同じ工具で異なる断面形状を持つ“転位歯車”が作れることを示す模型。

(注5) 広瀬茂久，絶対零度の決定に挑んだ日本の科学者，Netsu Sokutei 41 (3), 99–103, 2014。

(注6) インボリュート歯車 (Involute gear) や転位歯車といえば 東工大では？！

二つの歯車を滑らかに噛み合わせるためには、歯車の歯（接触面）の形状をインボリュート曲線にするとよいことが分っている。このインボリュート歯車の歯形選択と加工法及び転位歯車 (profile shifted gear) に関する中田孝（図18）らの初期の優れた研究は、「日本機械学会誌」及び「日本機械学会論文集」を中心に日本語で発表された。最近のCiNii 検索サイトでは、論文のタイトル・著者・所属が英訳され、外国人研究者も概要がつかめるようになっているが、所属は当時の英語表記で Tokyo University of Engineering となっている。

(注7) 岡田大士，博士論文「東京工業大学における戦後大学改革に関する歴史的研究」，113 & 120 頁，2005。以下は引用：新制大学の構

想期においては、東工大の英文名称にも変化がみられる。すなわち、Massachusetts Institute of Technology (MIT) を意識した “Tokyo Institute of Technology” の運用である。最初に “Tokyo Institute of Technology” が使われたのは、本章第1項で示した占領軍への1946年3月の報告文書と思われるが、その他学内文書での利用はどうだったのだろうか。占領軍報告以外の公的文書で書かれたもので筆者が確認できるのは、『東京工業大学学報』の英文名称の変化である。1947年4月に発行された1943年版学報（12巻）では、発行者を

“Tokyo University of Engineering” としているが、1948年5月に発行された1948年版学報（13巻）では、“Tokyo Institute of Technology” に変わっていた。また、『工業大学新聞』でも、1946年11月発行の433号ではタイトルの下に “THE KOGYO DAIGAKU SINBUN” と新聞のローマ字読みを示していたのを翌年の1947年1月発行の434号からタイトルの下に “Published by Tokyo Institute of Technology” と、“Tokyo Institute of Technology” が意識して使われた。これらのことから、1947年前後の境に、学内でも “Tokyo Institute of

Technology” の使用が一般的に行われるようになったとみられる。

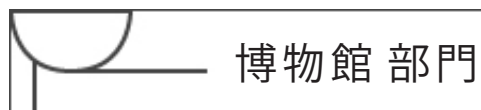
(注8) MIT 式の略称では英語の隠語を連想し、よくないので禁忌となっている。

(注9) 資史料館 とっておきメモ帳 7, コラム 7 (p. 15) 参照。

2015年7月

発行：博物館 資史料館部門

http://www.cent.titech.ac.jp/Publication_Archives/pg701.html



博物館 部門

東京工業大学 博物館



資史料館 部門

152-8550 東京都 目黒区 大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 cents Shiryou@jim.titech.ac.jp
<http://www.cent.titech.ac.jp/>

大谷 清（館長，理事・副学長）
 亀井宏行（教授，博物館部門長）
 奥山信一（教授，兼任）
 内川恵二（教授，兼任）
 広瀬茂久（特命教授，資史料館部門長）
 道家達将（特命教授）
 遠藤康一（特任講師）

阿児雄之（特任講師）
 渡利美知子（補佐員，司書）
 渋谷真理子（補佐員，司書，資史料館）
 尾野田純衣（補佐員，学芸員）
 佐々木裕子（補佐員，学芸員）
 益津玲子（補佐員，ライター）
 鎌田裕介（資史料館 文書担当）

本間英子（資史料館 文書担当）
 山田瑞絵（資史料館 文書担当）
 広報・社会連携課（博物館担当）
 秋友豊香（課長）
 長池宏哉（グループ長）
 乙津昌弘（主任）
 茂垣義範（主任，事務全般）